

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 4 月 24 日現在

機関番号：14401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580113

研究課題名(和文) 海外の大学教員との連携を目指す協働的日本語ライティング教育開発のための調査研究

研究課題名(英文) Research on cooperative Japanese writing education development with Japanese and other university professors.

研究代表者

村岡 貴子 (MURAOKA, Takako)

大阪大学・国際教育交流センター・教授

研究者番号：30243744

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)： 海外の大学教員との連携を目指す協働的日本語ライティング教育開発のために、東アジアと東南アジアの大学でそれぞれ日本語を教える9名の教員にインタビュー調査を行い、かつ、130名の学生に対して、実験授業の後アンケート調査を行った。調査の結果、まず、関係教員と教育観や文章観についてのビリーフの共有が必要であることが明らかとなった。また、日本で学位を取得した日本語非母語話者教員が、学習者の母語を用いて、ライティング教育において論理性を指導して論文スキーマを内在化させることが効果的であることが示唆された。

研究成果の概要(英文)： In order to obtain a perspective about cooperative Japanese writing education development with the university professors of Japan and foreign countries, we interviewed nine professors who teach Japanese at universities, and also conducted a survey of one hundred and thirty students after experimental Japanese academic writing lessons, in East Asia and South East Asia, respectively. The results were as follows: Firstly, it is important to share educational philosophies and views on the quality of academic texts in Japanese. Secondly, our research suggests that non-native professors in Japanese who received Ph.D.s at Japanese Universities are effective teachers of the logic of Japanese texts in writing class, as they use the mother tongue of their students, in order to help the latter to internalize schema of research papers.

研究分野：日本語教育学

キーワード：アカデミック・ライティング 社会への橋渡し メタ認知 内省 協働 ビリーフ 実験授業

1. 研究開始当初の背景

日本の大学院進学を志す留学生には、研究活動を円滑に行うための学術的文章の作成（以下、初級日本語等の「作文」と区別して「ライティング」）能力の育成は極めて重要である。しかし、その教育方法は、国の内外で共有された基準が確立されているわけではない。例えば、中国の大学では、教員個人のライティング教育へのピリーフは非常に多様で、教育理念も著しく異なる(1)。また、一般に、学習者の背景知識や学習方略には、母国の教育文化からの影響が示唆されている(2)。

以上の事情は、学習者の母国と日本における当該教育が有機的に連続することの難しさを示しており、内外の関係教員が、ライティング教育への共通した理念を持って教育を行う必要性が指摘できる。

代表者の所属先では、学位取得を目的とした留学生が7割以上と多く、文系理系ともに博士課程教育リーディングプログラムも複数採択されている。このような現状から、大学院レベルの効果的なライティング教育実施のため、関係教員間の相互理解は肝要であると言える。

(1)劉偉(2010)『中国人日本語学習者のライティングに関する実証的研究』大阪大学大学院言語文化研究科 博士学位論文 (2)村岡貴子他(2009)「論文スキーマ形成から見た専門日本語ライティング能力獲得過程学習者の文章と推敲作業の分析およびインタビュー調査から」2012年日本語教育国際研究大会口頭発表

2. 研究の目的

本研究は、上述した背景のもとで、日本の大学院に進学する留学生の日本語によるアカデミック・ライティング(以下、AW)能力を効果的に養成するために、留学生の出身地の関係大学教員との間の理念的・技術的連携を緊密にし、国や地域を超えて教育の連続性を確保する方法を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

本研究全体では、以下の方法を採用した。

- 1) 海外の大学(日本への留学生が多い、複数のアジア地域)におけるライティング教育方法に関する情報収集
- 2) 上記大学での実験授業による、代表者らによるライティング教材の有効性に関する学生へのアンケート調査
- 3) 海外の大学で日本語教育に従事する教員

へのインタビュー調査

- 4) 日本の大学で博士学位を取得した元留学生の教員に対する、ライティング学習と教育に関するインタビュー調査

4. 研究成果

研究成果は、以下の通り、4点にまとめて報告する。

(1) 海外の大学における実験授業

本研究の期間中、台湾の2大学でそれぞれ大学院生を対象として、さらに1大学で学部生を対象として、また、タイの1大学で学部3、4年生と大学院生の両方の、合計130名に対して実験授業を実施した。授業には、アカデミック・ライティングに関するテキストである村岡・因・仁科(2013)を活用して実施し、終了後にアンケート調査を行った。

その結果、上記テキストで用いた文章の比較・分析・評価を行うテキスト分析タスクは、論文スキーマ(論文や研究とは何かの概念知識の総体)形成に有効に働き、かつ、ライティング学習への意識化の深化が見られた。

一方、日本ではなく、母国の大学で学ぶ場合、ライティングは課外での自己学習はやや困難で専門家の指導や支援を直接受けたいとの希望が少なからず見られた。そのことから、海外の大学では、上級に近い日本語能力を有する学習者であっても、学習者の母語による解説や支援材料を提供する必要があることが示唆された。そのことから、学習者と同様の母語を有する教員の貢献が期待され、かつ、教員による、母語の違いを超えた協働体制の重要性が指摘できる。

(2) 海外の大学の日本語教育担当教員に対する現地でのインタビュー調査

上記(1)での実験授業を行った大学、および同地域のその他の大学において、日本語教育を担当する9名の教員に対してインタビュー調査を行った。調査の一部は、村岡・因(2015)および村岡(2016)にまとめた。

調査内容は、ライティング教育に関わる授業実践やカリキュラム、教材についての情報以外に、大学で扱うべき、アカデミックな文章に対する見解、ライティングの学習観・教育観に加え、昨今の、学術的な場面などにおける使用言語の英語化傾向に対するコメントも求めた。

なお、1名の日本人教員以外は、全員日本の大学で博士学位を取得した教員であり、自身が受けた研究指導の経験や、現在の論文執筆などの研究活動に関わる状況についても尋ねた。

以下、調査結果を、ライティング教育の現状と課題、調査協力者の研究活動上の日本語使用と英語化傾向に対する見解、の

2点に分類して報告する。

ライティング教育の現状と課題

調査の結果、まず、漢字圏の大学におけるライティング教育は、日本語非母語話者の教員が単独あるいは連携して担当し始めており、自身の日本留学経験を生かしつつ、論理的な文章作成の方法を学ばせるための、種々のプロジェクトワーク形式の学習活動を展開していた。これは、学習者と同じ母語を有する教員が、特に文章の構成や論理性についてより丁寧に指導が行える、有利な点を活用したものとと言える。

また、非漢字圏の大学におけるライティング教育は、大学によってかなり異なり、学期開始前にカリキュラムの相談は行われていても、日本人教員にほとんど任されているケースが少なくなく、学習者の日本語レベルが低いほど、伝統的な文型指導を中心とした作文教育も行われているなど、必ずしもアカデミックなライティング教育が強くは意識されていない状況が見られた。

しかしながら、一方で、大学によっては、学生の在学段階が上がり日本語レベルが高くなるほど、ライティング授業で扱う文章ジャンルの多様性が見られ、総じて、学習者が協働してプロジェクトを遂行する方法によるライティングを行うなどの学習活動の多様性もうかがえた。

以上のことから、調査協力を得た地域の大学では、ライティング教育の理念や方法は、多様ではあるものの、教育内容や教員の意識あるいは協働体制については、過渡期を迎えていると言ってもよい状況が見られるとまとめられる。

調査協力者の研究活動上の日本語使用および英語化傾向に対する見解

協力者は一様に、一部母語で行うほかは、口頭発表や論文執筆など日本語を用いて研究活動を行っていた。さらには、電子メールでの種々の連絡や交渉、日本からの研究者訪問の際の通訳も含め、職場での日本語使用も多々あることが報告された。つまり、自身の研究活動以外にも、大学の業務として、日本語を専門的に扱える人材としての業務もあり、日本語を理解しない上司と日本からの来客との間を、失礼のないようコミュニケーションを支援する役割も担っているケースもあった。

このような状況において、以下、一事例として、学術場面における英語化に対して明確に述べられたコメントを引用する。

その協力者からは、「英語のみで教育・研究を行うのであれば日本に来る意味がない、英語圏に行けばよい」と、英語一元化傾向への反論が率直に述べられた。自身の日本留学時の経験や、出身国で現地語を習得すること

なく日本語を教えている日本人教員が、学生の状況が把握できず十分な教育ができていない例を引き、「現地の人々の考え方や文化を理解するには、現地の言語の習得が必須である」と強調した。国際的学術場面での英語の優位は否定できないが、現地語である日本語の習得なしには日本での活動の可能性が限定されると考えられている。ここからは、現地語習得が広げる可能性の認識を高めることもAW教育の任務の一つであることが示唆された。

(3) 海外の大学の日本語教育担当教員に対する現地大学カリキュラムにおける卒業論文指導についてのインタビュー調査

研究交流を目的に来日した中国の大学に所属する1名の研究者に対して、特に卒業論文執筆に向けた準備段階のライティング教育を担当していることから、その点についてインタビュー調査を行った。

その結果、当該研究者の大学では、卒業論文執筆前に、論文スキーマ形成のためのゼミ形式の授業を行っており、学生の執筆態度や意識の向上に役立っている。実際には、短期的なプログラム以外で、日本に留学するケースは少ないものの、日系企業への就職や中国の大学院進学を目指す学生に対して、論文の表現や構成の指導のみならず、時間管理の重要性を強く指導し、かつ、寮生活を行っている学生同士のグループによる協働活動の成果も評価に入れることにより、在籍する学生全体の意識向上にも努めていた。

以上は、一事例であるが、今後の海外での日本語教育と日本の日本語教育との接続を検討するためにも、学習者の環境を最大限活用することも含め、示唆的であった。

(4) 日本で学位を取得した元留学生および日本人大学教員へのインタビュー調査

今回の調査においては、より広範に協力者を求め、種々の知見を得るために、日本語教育学以外の理系専攻、社会科学系専攻の大学教員3名にもインタビュー調査を行った(村岡・因2015)。

協力者のうち1名は企業での勤務経験が長く、もう1名は企業との共同研究を行った経験が長い。さらに1名は海外の大学での留学経験があり、学位も取得している。

調査の結果、協力者は一様に、大量の読解とライティング経験、添削を受けることの重要性を指摘した。それぞれ学位取得までに困難はあっても、論文執筆や研究活動自体において、指導教員や他者からの指導や支援を積極的に受けており、大量の学習および意識的かつ積極的で協働的な行動が、研究の深化とライティング能力の向上に結びついていることが明らかとなった。

以上の研究結果から、日本の大学と海外の大学における日本語教育の連携や協働のために、また、日本語ライティングの観点から、留学生がより円滑に学習を進めていくためには、関係教員の情報共有、ピリフの共有、さらには、学習観や教育観、文章観についての議論が必要であることが明らかとなった。それらの蓄積とともに、卒業生や修了生である元留学生の社会人などの実際の経験に裏打ちされたコメントや助言も、参照可能なものとして、カリキュラムの改善や教材開発に反映できると考えられる。そのような見解やコメントをリソースとして捉え、学習・教育活動に取り入れていく可能性が示唆された。

特に、上記調査の協力者である、日本で学位を取得した、海外の大学に勤める日本語非母語話者教員は、日本留学時に獲得した論文スキーマを活用しつつ、ライティング教育を行い、かつ、海外の大学で、必要となる日本語使用の場面で種々活躍している現状が明らかとなった。こうした論文スキーマ形成のためのライティング教育の位置付けを行う必要性を、各教員が認識し、教育観・学習観として言語や国・地域を超えて共有することの重要性が確認された。

今後の課題は、上記のように学習者と母語を共有する人材としての教員が、日本の内外の日本語母語話者教員との連携により、ライティング教育の具体的にどの場面や指導、学習支援でより貢献可能であるかの詳細を明らかにすることは、今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

村岡 貴子・因 京子、ワークショップ「日本語アカデミック・ライティングの核心をつかむ」実施報告および受講者へのアンケート調査の結果と考察、銘傳日本語教育、第17期、pp.1-17、招待、銘傳大学、台湾、2014

村岡 貴子、上級日本語アカデミック・ライティング授業の実践報告 -文章の比較・分析・評価タスクによる教材を用いて-、大阪大学国際教育交流センター研究論集 多文化社会と留学生交流、第18号、pp.99-112、2014

村岡 貴子・因 京子、国内外の大学教員が語る日本語アカデミック・ライティング教育への期待と課題 -自身の学習・研究・教育の経験から-、専門日本語教育研究、査読有、第17号、2015、35-40

〔学会発表〕(計7件)

村岡 貴子・因 京子、文章の比較・分析・評価タスクによる日本語ライティン

グ教材を用いた実験授業とその評価、第16回専門日本語教育研究討論会、富山大学、2014.3.1

村岡 貴子、日本語でのアカデミック・ライティングの学び方を意識化する、カセサート大学人文学部東洋言語学科、特別講義、タイ王国、2015.2.24

村岡 貴子、大学の日本語教育におけるライティングのあり方と意義、東京大学日本語教育連絡協議会及び講演会、招待講演、2015.3.9

村岡 貴子、アカデミック・ライティングの視点から見た大学における専門日本語教育、名古屋大学アジア法交流館落成記念国際シンポジウム第1セッション：日本法教育研究センターにおける法学と日本語教育学の多元複層的なアーティキュレーション、招待講演、名古屋大学2016,3,15

劉 偉・村岡 貴子、中国の大学における協働的日本語アカデミック・ライティング学習の可能性 -華南師範大学における教育実践に基づいて-、第18回専門日本語教育学会研究討論会、京都産業大学、2016.3.4、

因 京子、直感を補う納得に至る学習方法を求めて、国立台中科技大学日本語教育特別講演、国立台中科技大学、台湾、2016.2.22

因 京子、大学初年次生のライティングに対するメタ認知、韓国語日文学会2015国際学術大会、韓国語日文学会、韓国、2015.12.19

〔図書〕(計2件)

村岡 貴子、専門日本語ライティング教育 -論文スキーマ形成に着目して-、大阪大学出版会、2014

村岡 貴子、第3部第3章 大学に在学する留学生への日本語 AW 教育の再考 -来日前日本語教育との接続および社会への橋渡しを視野に-、三牧陽子・村岡貴子・義永美央子・西口光一・大谷晋也編『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』、くろしお出版、2016

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村岡 貴子 (MURAOKA, Takako)
大阪大学・国際教育交流センター・教授
研究者番号：30243744

(2) 研究分担者

因 京子 (CHINAMI, Kyoko)
日本赤十字九州国際看護大学・看護学部・
教授
研究者番号：60217239

(3) 連携研究者

石黒 圭 (ISHIGURO, Kei)
国立国語研究所・日本語教育・情報センタ
ー・教授
研究者番号：40313449